マルクス学位論文の検討

(Überlegungen zur Marxschen Dissertation)

宮　本　十　蔵

1

マルクスの学位論文（『デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異について』Über die Differenz zwischen demokritischen und epikureischen Naturphilosophie）が欠稿（第一部の四，五，および付録の大部分）未発見のままフランツ・メーリンクによって『マルクス・エンゲルス遺稿集』第一巻の巻頭に収められ公刊（1902）されて以来，既に60余年が経過している。時のボンの哲学教授カール・フリードリッヒ・バッハマンから学位授与に「とくに適わしい（vorzüglich würdig）」と批評されたこの論文は，その間さまざまな関心を刺激し，さまざまな評価を受けてきた。

その関心は次の三つ――と云ってもそれは密接な関係をもつ三つであるのだが――に大別できるであろう。第一にこの論文のエピクロス評価の可否，第二にここで評価されている自然哲学（原子論）と自然科学，とくに現代理論物理学との関係，第三にマルクス主義成立過程におけるこの論文の位置の問題である。

まず第一の問題であるが，23才のマルクスはこの論文で，従来少くとも自然哲学の面でデモクリトスの祖述者，否それどころか改悪者とまで酷評されていたエピクロスを，通説とは逆に，同一の基礎理論に立ちながらむしろ対立する諸側面があることを指摘することで，「最も偉大なギリシヤの啓蒙家」[1]と評価し直したのであった。その論旨はもとよりマルクスの独創であるが，しかし傾向として，エピクロスの思想をストアならびにスケプシスの思想とともに「自己意識の哲学」としてとらえ直し，自己のものとしようとする努力は，当時のマルクスの先輩や友人たち，ブルーノ・バウエル（Bruno Bauer）やケッペン（K. Fr. Köppen）ルーテンベルク（A. Rutenberg）ら青年ヘーゲル派，とくに「ドクトル・クラブ」の人びとに共通で，マルクスもこれらのギリシヤ思想を詳細に検討し，七冊のノートを残している。それはまた当時シュライエルマッハーがプラトンに傾倒し，ベルリン・アカデミーが大アリストテレス著作集を刊行していた事情に呼応しかつ対立するものであろう。

当時の時点での資料の不備，研究の未熟ということもある。だから唯物論者のなかでもプレハーノフのように，この論文は「今日の読者には全く学問的意味をもたない。それが重要なのは，その著者の精神的発展を判断する資料としてだけだ」[2]とするものもある。しかし，E. G. シュミットが指摘するように，「時代的に制約された欠陥だけを注視するなら，マルクスの学位論文を不当に扱うことになろう。一そう本質的な問題は，マルクスがデモクリトスおよびエピクロス研究のこのような欠陥にもかかわらず，新しい認識をなしたかどうか，ということと，これらの認識が百年以上をへた今日，なお価値があるかどうか，ということである。私は，第一の問ばかりでなく第二の問にも，本質的な点で然りと答えることができると信じる。マルクスに至るまで，人びとはデモクリトスにせよエピクロスにせよその他の古代の哲学者たちにせよ，多かれ少なかれ『体系』の狭小な再構成を行うことで満足していた。

マルクスは，エピクロスにデモクリトスと与することを動機づけた理由を求める研究が，同時にエピクロスをデモクリトスから離脱するようにさせた理由を探究するものでなければならない，ということを認識した。[3]」

マルクス学位論文の内容の吟味は後述するとしてごく基本的な点にだけふれておくなら，この論文の注目に値する点は，かれが古代哲学者のうちでもとくにデモクリトス，エピクロスの唯物論をとり上げ，しかも後者における理論的一貫性，世界観としての整合性を確認した点である。この整合性をえてはじめて哲学は現実の啓蒙的力となりうる。ヘルマン・レイはエピクロスの果した役割を次のように述べている。「唯物論，無神論，および原子論は，ギリシヤ人の後世への贈物である。自然は，自分を過去の文化のうちにつなぎとめていた杭から解放される。無知，弱さ，社会的暴力，海や嵐や大地の激怒，これらのものに対する人間の可能的勝利が目に見えてくる。いつも新たに偽の現実の反映や幻想的な世界観を生み出す社会的制約はまだ粉砕されていないにしても，解放された精神の力の自覚によって，敬神，宗教的なもの，聖なるものへの精神的隷属が一挙に廃除せられる。[4]」エピクロスをいわゆる「エピキユーリアン」の快楽主義的人生論に皮相化したり，あるいはかれの偶像論を逆手にとって神の現在の証明に役立てたりする企図[5]が後を断たない事情を考えるなら，不充分とはいえ統一的な世界観にまで仕上られたこの唯物論をとり上げ，それを評価したというそのことだけでもマルクス論文の意義は極めて大きいと云わなければならない。

当時かれはまだ自覚的な唯物論者でなかったけれども，この世界観的洞察は，基本的に正しいものであった。そしてそのことは，第二の問題，すなわちこの論文が現代自然科学，とくに理論物理学に有効な指針を与えていることと無関係ではあるまい。理論物理学者坂田昌一氏は，自分の体験的見地からマルクスの学位論文とのちにエンゲルスが展開する自然弁証法との関係を強調し，「素粒子についてのドルトン的な，あるいはデモクリトス的な物質の窮極という立場を捨てなければならない」という氏の研究の理論的基礎の原型がマルクスのこの論文にあり，それによっていわゆるコペンハーゲン解釈を克服する武谷解釈が生まれた，と述べているが，極めて興味深い，傾聴すべき発言と思われる。[6]

このようにマルクス学位論文が――まだ弁証法的唯物論成立以前のものであるとしても――決して低く評価すべきものでないとするなら，われわれはそれをかれの思想の形成過程の中でどのように位置づけるべきであろうか。これが第三の問題であり，かつまたこの論稿の最も大きな関心事である。従来この論文の思想形成史的位置づけと，従ってまた評価に関しては，全くヘーゲル主義的とするものから殆どすべての後のマルクス主義の萌芽をもつものとするものまで，それぞれの読み方，それぞれの意図，それぞれのマルクス主義のとらえ方によって，各様の見解が表明されている。われわれはこれをどのように理解したらよいのであろうか。

2

1902年，この論文がはじめて公刊されたとき，メーリンクはその解説の中で，「この論文の明白な弱点は，すでに献詞で示しているように，なお全く観念論の地盤に立っている，ということである[7]」と述べ，その見地をやがてマルクス自身によって克服されるヘーゲル観念論のそれとし，以後暫くこの見解は支配的であった。事実，マルクスはヘーゲルの言葉を用いているし，またよく言及されるように，ウェストフアーレンへの献詞の中で，「それのみ

が真実の言葉を知る，あの深い確信をもった，太陽のように赫灼としたイデアリスムス」(MEW, E1, 260)[8] とイデアリスムス（観念論——ただしこの場合唯物論との対立関係においてとらえられていない）をたたえ，さらに序言のなかでもヘーゲルを「巨人のごとき思想家」(E1, 262) と礼賛している。その限りにおいて見るならメーリンクの云う通りであろう。しかしマルクスは上述の引用にすぐ引きついで，「イデアリスムスは決して空想（Einbildung）ではなくて真理である」として，根拠を欠くローマン的な心情主義を拒否する姿勢を示しているし，またヘーゲルに関してはその壮大な体系や哲学史の構想をたたえながらも，「一つにはかれがとくに思弁的と名づけたものについてかれが抱いていた見解が，この巨人のごとき思想家がこれらの体系（エピクロス，ストア，スケプシスの諸哲学）のうちに，それらがギリシヤ哲学史ならびにギリシヤ精神一般に対してもつ高い意義を認識することを妨げた」(E1, 261～2) とし，ヘーゲルの思弁性を批判している。たしかにヘーゲルの基本的見地のいくつかは継承されている。だが得られた結論から云っても，マルクスはエピクロスを「最も偉大なギリシヤの啓蒙家」と評価するに対して，ヘーゲルにエピクロスの思想を「没思想的」で「空虚なおしやべり」とし，——レーニンの言葉によるなら——「観念論者による唯物論の歪曲と中傷の見本」を示しているにすぎない。[9] 従ってこの論文の見地を単にヘーゲル的ときめつけることは到底不可能である。

だからD. リヤザノフが新しい『マルクス・エンゲルス全集』を編纂したとき，学位論文とあわせて研究ノート七冊を収めた第一巻第一分冊の序言で，「マルクス自身は多分全くヘーゲルの路線で動いているつもりであっただろうけれども，しかし少くとも詳細に論じている多くの点では，ヘーゲル哲学をとくに青年ヘーゲル派的に，——感覚的な生きた世界に対する強い情熱をもって，強度に実在論的な意味に——理解していたのである」と述べ，青年ヘーゲル派的見地を強調したのも当然であろう。リヤザノフは，やがて完全に克服されたとするメーリンクの見解に対し，この論文の課題はその後も（唯物史観成立後も）マルクスが屢々立ちかえり展開した問題であるとし，『聖マックス』(1845～6) やラッサール宛の書簡 (1857, 58, 62) が指摘されている。[10]

だが果して当時のマルクスの理論的立場の振幅を，下底ヘーゲル主義，上底青年ヘーゲル派と云うような把握でとらえきることができるのであろうか。確かにマルクスは当時フランス通りのカフェハウスを根城とする「ドクトル・クラブ」の有力な一員であり，仲間のケッペンが1840年に出版したかれの著を献じたほどであった。しかし青年ヘーゲル派の古代哲学（とくにエピロス，ストア，スケプシス）に対する関心は，主としてこれらの諸体系の中に共和制民主主義的な主張と，思惟を宗教的拘束から解放しようとする意向を発見し，それを現実の問題に適用しようとする類のものであった。かれらが政治的ないしは宗教批判的な活動に中心を置いていたのに対し，その時期のマルクスは——それらの問題に無関心というのではなく，それらの問題を論ずるときでも——哲学的であった。かれは皮相な現実主義にとどまりえず，問題をつねに哲学的レベルにまで深め，青年ヘーゲル派の理論を基礎づける仕事を担当しながら独自の展開を行い，かれらの中でも指導的役割を果したのであった。このことはやがて青年ヘーゲル派の友人たちがフィヒテ的な主観主義に逆転して行くのに対し，マルクスがドイツ古典哲学のあらゆるよきものを総括し，新しい世界観をうちたててゆくという差となって現われる。そしてその差は，この学位論文のそこここに表明されている。

最新刊ディーツ版の『マルクス・エンゲルス全集』補巻第一分冊の解説では，すでに部分

的に青年ヘーゲル派をこえたマルクスの見地が明示されている。「マルクスはエピクロス，ストア，スケプシスの諸哲学のノートにおいても，かれの学位論文においても，『まだ完全に観念論的ヘーゲル主義的見地に立って』(Lenin, Werke, Bd. 21, S. 69) いるけれども，これらの労作において，まさしく青年ヘーゲル派の見地に基いてヘーゲル哲学の批判的考察を表明し，その考察は個々の問題においては部分的にかれの青年ヘーゲル派の友人たちの見解をもこえている。」(E1, XI)

この位置づけは，若きマルクスと理論的に成熟したマルクスとを見通し，ヘーゲル主義の克服を必然的な過程とするもので，その限り正しくもあり適切でもあろう。だがしかし「ヘーゲル的でありながら青年ヘーゲル派的であり，しかも部分的に青年ヘーゲル派の見地をこえている」という表現は，規定として究極何をあらわしているのであろうか。それはヘーゲル的なのか，非ヘーゲル的なのか。「晴ときどき曇，ところによって雨」という定めがたい秋の空を案ずるのに似ている。

この点に関しては，T. I. オイゼルマンのこの方面で最も新しく最も権威ある研究書においても同じである。かれはその著『マルクス主義哲学の形成』の中で，3章20数ページにわたってマルクスの学位論文を究明し，この論文の提起している諸問題を整理し，マルクスがヘーゲルと基本的な態度を同じくしながら全くちがった（「比較にならないぐらい深くそして正しい」）結論を導き出した事情，青年ヘーゲル派の友人たちとの相異などを明らかにすることで，この論文の成果を評価し，この時期のマルクスの見地を「弁証法的観念論」と規定している。[11] かれの分析は従来見られなかったほどに鋭く，かつ正しい多くのものを含んでいる。だがかれの規定，「弁証法的観念論」とは，まさしくヘーゲルの見地である。[12] かれはヘーゲルという名を用いなかったが，やはり若きマルクスの見地をヘーゲル的と規定しているのであり，しかもそれでいて非ヘーゲル的な諸側面を指摘しているのである。

3

かくて，この時期のマルクスの思想形成過程における位置づけは，何らかの形でヘーゲルとの関係においてとらえられるのが標準的常識的と云える。事実，ヘーゲルぬきの若きマルクスを考えることは不可能であり，そのことに毛頭異議はない。しかし是が非でもヘーゲルをふちどらせ，ヘーゲルとの接離の関係でとらえねばならぬ，とするのはどうであろう。私はここに二つの疑問躊躇を感じるのである。一つは，まだ急激な形成の過程にある，豊富な問題意識をもった，しかし時には混乱した未定着の思想を，何々主義というような一面的な規定でとらえことの可否である。例えばコルニュのように，まだ未熟未成の時期まで細かく一つ一つを何々時代，何々主義と呼称し烙印するのが，思想の形成過程を追求するのにどう云う有効性をもち得るのだろう。[14] 検討はもっと内在的になされるべきではないのだろうか。

もう一つはヘーゲル哲学そのものの評価の問題である。確かにヘゲール哲学はマルクス主義三源泉の一つ，――ここで当面問題となる――ドイツ観念論（古典的ドイツ哲学）の結論であり，最高の峯である。しかし，だからと云ってドイツ観念論のすぐれたもののすべてがヘーゲル哲学に結集していると云えるであろうか。ヘーゲルの汎論理主義的な表現において，かつてカントやフィヒテらでは漠然とした表現でしかなかったものが極めて明確な形で定着されているのは事実である。だがその反面，かえってこの表現の中で，逆に弱められ薄められたものがあるように思われるのである。例えば後にマルクスがフォイエルバッハ・テ

ーゼで云っていることであるが，人間の意識の能動性の問題がそれである。唯物論者フォイエルバッハでは単に受動的にしかとらえられなかったのに，観念論者カントにおいて見事にとらえられ，ドイツ解念論の大きな成果の一つとなっており，やがてそれはヘーゲルの体系の中で自己実現の過程として普遍化される。だがその普遍化と引きかえに，フィヒテに見られるような強力さは全く失われることとなった。シェリングに見られる徹底した内的反省の契機にしてもそうである。かつて東ドイツにおいてルカーチの『若きマルクス』が発端となり，ヘーゲル哲学とマルクス主義との関係をめぐって一大論争が行われたが，ヘーゲルとマルクス主義とを強引に結びつけようとする問題提起そのものに難点があり，その枠の中ではどのような結論が出されようと生産的とは云いがたく思われるのである。

それにしても，若きマルクスがヘーゲルから多くを学んだことについて疑う余地はない。問題はどういう学び方をしたかということである。残念なことにかれが必ずや作ったであろうヘーゲルの――精神現象学や論理学の――抜萃ノートは今日残っていない。しかしかれはあの「グロテスクな岩のようにごつごつしたメロディ」(E1, 8) を辿りながら，もちろんエピクロスやストア主義のノートを作ったときと同じように厳密に読んだであろう，と思われる。だがマルクスは，――個々の概念に躓づき暫く立止まるということはあっても――ヘーゲル的思弁に溺れた時期は，かりにあったとしても極めて短期間で，むしろ殆ど無かったと云ってよいように思われるのである。学位論文の時期からややさか上るが（37年頃でこの頃かれははじめてヘーゲルを読んだ），かれはあるエピグラムの中で自分のヘーゲルの読み方を，「浪立つ思想の大海を旋回し，そこに言葉を見つけ，発見したものに固執する」と云い，カントヤフィヒテが上天（エーテル）をさまよったのに対し，自分は「合理的なもの，街で見つけたもの」を理解しようと努力するのだ，と云っている。[14] そして学位論文につけた註の中では，「ヘーゲルの不備な点のすみずみにまでも霊感を蒙り従属していた者」を非難し，「師（ヘーゲル）の洞察の背後にかくされている意図」について語っている。(E1, 326) だからマルクスはあの思弁性にとらわれることなく，かなり自由に，独創的に理解し展開したように思われる。39年12月11日付，マルクス宛のバウエルの書簡にはその様子が示されている。「君（マルクス）が対抗（Gegenübertreten）等々の理論的エネルギーについて云っていることは，私には，すでにヘーゲルが方法についての章のその箇所で，極めてはっきりと展開しているように思えるし，それは本質において反省の形式をもち，まさしくそのようなものとして展開されるように思える。そして，有（Sein）についてヘーゲルは，どこかで，有の領域では形式の弁証法と規定態の運動はただ『蔓延している』にすぎず，従ってまだ反省にはあらわれておらず，それは本質においてはじめて可能なのだ，と云っている。[15]」この文面から見ると，バウエルの方がいかにもヘーゲル的でヘーゲルに固執している感がする。これはバウエルたちが結局ヘーゲル的な（それこそ思弁的な）宥和を克服しえず，間もなくマルクスの批判を受けねばならなくなるのと無関係ではあるまい。マルクスの博識と独創性は，ケッペンの「君は思想の貯蔵庫，理念の工場だ[16]」という賛辞からも想像できよう。

云うまでもなくこの時期のヘーゲル批判は不徹底であった。オイゼルマンの云うように当時のマルクスは「充分にヘーゲルの欠陥を見抜いていない。[17]」しかしフォイエルバッハを別とすれば，当時の青年ヘーゲル派の中で，この差異は質的な差異ではなかった。マルクスは学位論文を書く過程で，最初バウエルの師マールハイネッケ（Marheieneke）に対し，ついでボンの神学教授であったヘルメス（Hermes）一派に対して，それぞれ批判を行おうと

し，何れもバウエルの忠告によって断念している。（ヘルメス批判は40年の夏一応完成している。）それらは何れも宗教と哲学のヘーゲル的宥和に対する批判で，この批判は哲学的レベルにまで掘り下げれば当然観念論批判となる。バウエルがこれを断念させたのは単にかれの世俗的な配慮からばかりではないように思わかる。ヘーゲル学派の三分割を表明し，教会史の歴史的批判でローゼンクランツ（Rosenkranz）と対立し自ら左派参加を名乗ったD. Fr. シュトラウス（Strauß）も，やがて（左派から中央派に）「ボールのように投げもどされることになる」[18]ことを予想しての左派でしかなかった。

若きマルクスの場合，事情はかなり大きくちがっているように思われる。フォイエルバッハが本格的な観念論批判を表明したのは，1842年および43年の『哲学改革のための暫定的提言』『将来哲学の根本問題』においてであるが，学位論文の頃すでにマルクスは，独自のペースで，唯物論でこそなかったが思弁性批判ということで，フォイエルバッハに極めて近い線まで成長していたと考えられる。思弁性に対する批判のある水準にまで達していてはじめて，ドイツ観念論の諸成果をリアルに吸収しえたのであり，他の青年ヘーゲル派の人たちにとって転落であり逆戻りであるものが，かれには上昇であり前進でありえたのであった。[19] もしこのような視点が許されるなら，われわれは単にヘーゲル的尺度を用いることなく，より豊富な問題をかれの論文に見いだすことができるように思えるのである。

4

オイゼルマンはこの論文の結論を二つに集約している。第一に「抽象的な原理は弁証法的自己否定を，すなわち発展を求める」ということ，第二に「自然学を倫理学に従属させる原理はなりたちえない」ということである。[20] この指摘は適切である。前者からは弁証法が，後者からは唯物論でないまでも反観念論が出現し，両者は相まって弁証法的観念論から弁証法的反観念論への道を拓くであろう。だが，このような結論を生み出した根源的な問は何であったであろうか。マルクスは漫然とデモクリトスとエピクロスの差異を並べようとしたのでは決してない。かれ自身の関心を，デモクリトスとエピクロスの対立に託して提起しているのである。そのような関心をもってマルクスの論述に接近するとき，われわれはそこに様ざまな問題があることに気付くのである。

その最も根本的な問は，「一般的差異」のところで提起されている，現実の哲学的認識と科学的認識の二律背反の問題である。アトムのみを真の実在とするデモクリトスにとって，感性的現象は主観的仮象となる（もっともこの点，アリストテレスの伝える二つの説が互に矛盾しているのだが）が，しかし原理から離れることで現象界は相対的な独立性を得る。そこでデモクリトスは広くかつ遠く，経験的実証的な知識の蒐集に赴くのであるが，これは悪無限であって絶望したデモクリトスは自ら盲目になる。「かれが真だと考える知識は無内容であり，かれに内容を与える知識は真理性を欠く」（E1，273）とマルクスはカント的な表現でその二律背反を表明している。それに対して「すべての感覚は真なるものの伝令である」（E1，271）と考え，感性的現象界を客観的とするエピクロスは，かえって「哲学に満足し，これに浄福を見いだしていた。」（E1，273）マルクスはこの対立から単に無条件的にエピクロスの優位を結論しているのではない。かれは「このような対立には或る顛倒（Verkehrtheit）があるように思われる」（E1，277）と述べている。以下二章を欠くのでその展開は充分知りえないが，カント的悟性と理性の二元論がヘーゲルの整合的な体系にもかかわらず決

して克服されていないことをマルクスは気付いているように思われるのである。ヘーゲルの成功の秘密はあの思弁性にあった。とすれば，その思弁性に危惧をいだくようになった者は，直接ヘーゲルからではなく，もう一度カントの地平にまで戻って問題をたて直し，改めて新しい世界観の可能性を問わなければならなかった。これは当時のマルクスにとって深刻かつ緊急の問ではなかっただろうか。そしてこの問こそ，さきのオイゼルマンの成果なるものを生みだすことになり，さらに新しい科学的世界観に発展するものではなかっただろうか。

かくてマルクスは「一般的差異」において「必然」と「偶然」の関係を，「個別的差異」においてアトムの「偏差（Deklination）」の問題（これもまた必然と偶然の問題である），アトムの「属性」の問題，さらに atoma archai（不可分的始原）と atoma stoicheia（不可分的元素）の関係，アトムにおける「時間」の問題を論ずるが，これはすべてオイゼルマンが云うように「抽象的規定が弁証法的自己否定に至る」必然性を示すものである。これらは弁証法的運動として把握されており，その限りヘーゲル的である。だがここにおいてもマルクスは，すべてヘーゲル的見地から設問するのではない。例えばエピクロスにおいて「感性的知覚の抽象形式」(E1, 296）としての時間概念を見いだすのであるが，これはヘーゲル的というよりむしろカント的であろう。ヘーゲルにおいて時間は，空間の否定が対自的に措定されたものであり，空間と相まって運動を構成する。とすればこれは退歩ないし転落であろうか。否，これもまた思弁的な倒立したヘーゲルの時間概念を根本的に問い直す設問にほかならない，と思われる。かれは「現象を現象として定立する現実的形式」(E1, 259）である時間を主体的に問おうとしたのであった。

第二部第五章の「天体気象」論はイデオロギー批判を含み，そこからオイゼルマンの云う第二の結論が導出されるのであるが，ここで今までエピクロスの自然哲学全体を貫いていた有（存在）と本質，形式と質料の矛盾，つまり弁証法が止揚され，諸契機が宥和される。これもまた極めてヘーゲル的な敍述である。しかしここでとらえられたものは具体的ではあるが個別的である。それは抽象的個別的なものよりはもちろん，抽象的普遍的（ストア的）なものよりもすぐれている，とされる。だがヘーゲルにおいて志向される絶対最高のものは，極めて観念的な具体的普遍であった。とすれば，エピクロス哲学の原理とされる「自己意識の絶対性と自由」は，やはりドイツ啓蒙主義の完成者カントにより一そう近い概念であるように思われる。ヘーゲルにおける「自己意識」はその発生期の抽象的段階でこそ自由を謳歌しえても，やがて必然的に「不幸な意識」に転化しなければならない。マルクスが見いだそうとしたものは，ヘーゲル的な絶対者でなく，むしろ街の個々の市民であつた。

その他同様の問題点はかなり多いように思われる。だが中でもとりわけ重要なのは，理論と実践の関係である。一般にこの論文の時期のマルクスは，理論そのものを実践と考える観照的態度をとり，それが克服されるのは1843年末の『ヘーゲル法哲学批判』においてだとされている。確かにかれはこの論文の註のなかで，「哲学の実践はそれ自身理論的である」と云い，「個々の存在を本質において，特殊な現実態を理念において量るのが批判である」と云っている。だがかれは同じ註の中で，「哲学の実現は同時その喪失である」とし，「哲学が非哲学から世界を解放するということは，同時に世界を一定の体系として桎梏につないだ学からの哲学自体の解放である」と述べている。ある哲学体系の実現は単に客観的であるのではなく，同時に主観的側面をもつものであり，それによってこの実現が哲学の進歩として

現われる，というのがかれの考えである。(E1, 327～9) だからかれにとって哲学はミネルバの梟ではない。そこにはむしろフィヒテ的な語調を見いだすことができよう。

5

私は今，カントとかフィヒテの名を冠して，単にヘーゲル的尺度では量りえないもの，あるいは逆転としか評価されないものの若干を考察した。しかしこのことは必ずしもマルクス自身がこれらの人びとを深く読んだということを意味する必要はない。これらの問題はヘーゲルの思弁性に対する批判がある一定の水準に達したとき，必然的に生じうるものであった。かれはドイツ観念論という形で系統的に展開したものを，もう一度ちがつた次元で，主体的に展開してみる必要に迫られたにちがいない。

かれが素朴唯物論からではなく観念論から出発し，内在的にその思弁性を克服してゆく過程は，やがてかれの新しい世界観的見地を生む。だがそれは一挙に生じたものではないし，また決して整合的段階的なものでもない。その間には——基本的な見地は堅持しながらも——ゆきつもどりつの過程があったに違いない。大まかなスケッチとしては，「ヘーゲル主義→青年ヘーゲル派→唯物論」という図式もよかろう。だがそれだけではかれの思想形成の過程を追求しえないように思われるのである。すでに見た通り，ある時期で横に切って見たとき，そこにはヘーゲル主義もさることながら，それに対する批判からドイツ観念論の最も始原的な問題までが見いだされるのである。学位論文の時期とは，まさしくそのような模索期にあった。だが重要なことは，この模索がすでにある一定水準の反思弁性という方向づけによって貫かれていたことで，そのことによってかれはドイツ観念論の諸問題と大胆に対決し，そのすぐれたもののすべてを自己のものとすることができたのである。

ヘーゲル主義を尺度とする標準的解釈では，この——単にヘーゲルというのではなく，直接——ドイツ観念論の全過程と対決したという面が甚だ微弱にしか描かれぬのが常であるように思われる。そしてそのため，かえってヘーゲルを学ぶことがマルクスを学ぶことの躓きになるというような見解や，あるいはまたヘーゲル主義と若きマルクスを断絶なく結びつけ，マルクスの思想の本質的な意義を見失わせるごとき見解に道を拓いているように思えるのである。最近数多く出版される初期マルクス研究書のうち，この面を指摘しているものは極めて少く，僅かにジョン・ルイスを挙げうるにとどまる。[21] 甚だ粗雑な分析に終ったけれども，あえて一つの問題として提起したいと思った次第である。

註

1) Marx Engels Werke, Ergänzungsband, Erster Teil, S. 305 (1968, Berlin)
2) G. W. Plechanow: Werke, Bd. XI, 3 Auflage, S. 366
3) E. G. Schmidt: Die Doktordissertation von Karl Marx und die klassische Altertumswissenschaft, in Doktordissertation von Karl Marx, Eingeleitet und bearbeitet von G. Mende, Friedrich-Schiller-Universität, S. 16
4) Hermann Ley: Geschichte der Aufklärung und des Atheismus, 1, S. 325 (1966, Berlin)
5) たとえば，G. Freymuth: Methodisches zur epikureischen Götterlehre, in Philologus, Bd. 99, Berlin-Wiesbaden 1955, 1. 2., S. 234 ff

6) 坂田昌一：現代科学の方法（講演，要旨「名古屋大学新聞」300号）

7) F. Mehring : Gesammelte Schriften, Bd. 13, S. 19 (1961, Berlin)

8) Marx Engels Werke, Ergänzungsband, Erster Teil, S. 260 (1968, Berlin) 以下本文中（E1, ……）とあるは同書。

9) Lenin : Werke, Bd. 38, S. 292

10) MEGA I, Bd. 1, Erster Halbband, Einleitung, S. XXXV～XXXVI

11) T. I. Oiserman : Die Entstehung der marxistischen Philosophie, S. 39～61 (1965, Berlin)

12) オイゼルマンは他の著, Zur Geschichte der vormarxschen Philosophie, S. 107～121 (1960, Berlin) でヘーゲル哲学を弁証法的観念論と規定している。

13) コルニュ (A. Cornu) は Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk, Bd. 1 (1954, Berlin) のなかで，若きマルクスの思想形成過程を，啓蒙——ローマン主義——ヘーゲル主義と細分する。

14) MEGA I, Bd. 1, Zweiter Halbband, S. 41～2

15) A. a. O., S. 235

16) A. a. O., S. 257

17) Oiserman ; A. a. O., S. 45

18) David Friedrich Strauß ; Schriften zur Verteidigung meiner Schrift über das Leben Jesu und zur Charakteristik der gegenwärtigen Theologie, 3 Heft, Tübingen, bei C. F. Osiander, 1837, S. 126

19) マルクスが学位論文を書きあげた1841年の暮には，老シェリングが返り咲き，キェルケゴール，バクーニン，それにエンゲルスまで聴いた著名な講義をはじめる。ヘーゲルを自分の同一哲学の祖述者に過ぎぬとするシェリングの積極哲学に対抗するため，青年ヘーゲル派の人たちは多く，フィヒテの主観主義の盾にかくれようとする。

20) Oiserman : A. a. O., S. 45, 46

21) John Lewis : The Life and Teaching of Karl Marx, p. 31 ff. しかしまだ意に満たなぬ多くの点を感じさせる。